



Title	インドネシア語と日本語の初対面会話における自己開示の事例分析：大学生のオンライン会話における自己紹介部分の分析を通して
Author(s)	ラーマナ, ヌル アリニ
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 153-166
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インドネシア語と日本語の初対面会話における自己開示の事例分析 -大学生のオンライン会話における自己紹介部分の分析を通して-

Rahmana Nur Arini

1. 背景

自分自身の意見、性格などの自分自身の情報を意図的に他者に対して開示することは、心理学者のジョラード（1971）により「自己開示（self-disclosure）」と呼ばれている。特に初対面会話では、適切な自己開示は相手との距離を縮め、人間関係を構築するうえで重要な役割を果たす。

筆者はインドネシア語話者であるが、人になかなか言えないような自分についての深い情報を、インドネシア語話者は初対面の場面でも、他人に提供するという印象がある。例えば、結婚関係、家族構成などである。それに対して、日本語母語話者は初対面会話において、自分の情報を他人にあまり提供しないように感じられる。このように、インドネシア語と日本語の初対面の会話において、自分に関する情報を他人に提供する方法やその内容は異なる可能性があると考えられる。初対面会話の最初の数分間、いわゆる自己紹介の段階では、相手に名前、所属、出身などについて自分に関する基本情報を提示することで、第一印象が形成されることも多く、自己紹介における自己開示の重要性にも目を向けられる必要がある。

本稿では、インドネシア語母語話者と日本語母語話者が自己紹介の段階において、どのように基本情報を開示しているのか、また、そこで自己開示はどのような機能を持つのか、大学生の自己紹介を通して考察したい。

2. 先行研究

樋口（1996）は、初対面会話の話題の展開に関して、自己紹介部を中心に、日本語母語話者同士の会話と日本語母語話者・非母語話者の会話を比較した。母語話者同士の会話でははっきりした自己紹介の固まりを観察することができるのに対して、日本語母語話者対非母語話者ペアでは、自己紹介部とその他の部分の区別が見られず、自己紹介をしてもすぐ他の話題に発展するケースが多かったとしている。樋口の研究では自己紹介部から日本語母語話者同士と日本語母語話者・非母語話者の会話の話題がどのように展開するのかが明らかにされているが、本稿では、日本語母語話者同士とインドネシア語話者同士を比較する。今田（2015）は、出会いの初期の集団内での自己紹介を分析した。その結果、さまざまなストラテジー（呼称、エピソードなど）を使用し、相互に配慮しながら関係を構築しようとしている彼らの多様な姿を描き出している。今田の結果では、日本語母語話者の学生は、呼称に呼び名や研究科の役職名を顕著に使用し、研究科内のエピソードに言及するなど、総じて「研究メンバー」「仲間」という共有カテゴリー集団を利用していた一方、留学生は親しい関係を表すために、呼称を利用している例はあまりなく、言及内容も、出身、学年、

専門など最小限の情報開示に留まるものが多く、「外国人留学生」として自らをカテゴリー化することが多かったとのことである。また、日本語母語話者の学生と留学生の自己紹介の双方に笑いを交えた自己卑下や自慢回避の傾向が見られたとしている。岡本（2006）は大勢を前にした口頭開示ではなく、学生に教師への自己紹介文を書いてもらい、心理学的視点からその自己開示を考察した。岡本は大学1年生が教師に対して行う自己紹介の場面を分析し、そこには自身の背景に関する事実の提示が多く、感情的側面や内面についての話題が皆無であったと報告している。

以上の先行研究より、初対面会話における自己紹介の研究では、日本語母語話者の自己紹介のやりとりとして、日本語非母語話者と比較されている研究が見られたが、インドネシア語話者との比較はないため、今回はインドネシア語話者と比較して、考察していく。本稿の目的は、自己紹介の段階では、インドネシア語話者と日本語母語話者が自己紹介の段階において、どのように基本情報を開示しているのか、また、そこで自己開示はどのような機能を持つのか、大学生の自己紹介を通して考察し、両言語の初対面会話での自己紹介における共通点と相違点を明らかにすることである。

3. 研究方法

3.1. データ収集

会話データ収集の対象者は、初対面の男性同士のペア及び女性同士のペアの大学生（20代）とする。大学生を対象とするのは、社会人と比べて属性や生活スタイルなどを共有しているため、話題がある程度統一されるのではないかと考えられるためである。

新型コロナウイルス感染症の影響により、対面の会話からのデータ収集が困難になり、パソコンやスマートフォン上でZoomというアプリを用いた会話をオンラインで収集した。データ収集に際して、筆者はまず、研究の目的を説明し、研究にデータを用いる承諾を得た。その後、Zoomの録音・録画の機能を利用して、レコーディングが始まってから、会話を開始してもらった。レコーディングのため筆者は同じミーティングに参加しているが、レコーディングの際、筆者のビデオ及びマイクはオフに設定して、画面から離れた。

具体的な対象者の構成は、インドネシア語話者の5組10名（男性2組4名、女性3組6名）、日本語母語話者5組10名（男性2組4名、女性3組6名）の合計20名である。インドネシアは多民族国家であるため、各々の地方の地方語が母語として話され、第二言語としてインドネシア語が習得される場合が多い。なお、インドネシア語は地方語とは異なり、国語というステータスをもつ。ただその場合でも、インドネシア語はほぼ不自由なく用いられる。

表1 会話参加者の詳細

言語	No	グループ名	氏名	性別	学年	所属	会話記録日	会話の長さ	出身地
日本語	1	JF④	JF_7	女性	4年	A大学・外国語学部	2022年 2月15日	約25分	北海道
	2		JF_8	女性	4年	B大学・多文化コミュニケーション学科			大阪府
	3	JF⑤	JF_9	女性	3年	A大学・外国語学部	2022年 3月10日	約54分	大阪府
	4		JF_10	女性	4年	C大学・言語文化学部			栃木県
	3	JF⑥	JF_11	女性	3年	A大学・外国語学部	2022年 3月17日	約34分	大阪府
	4		JF_12	女性	4年	C大学・言語文化学部			東京都
	5	JM⑤	JM_9	男性	3年	A大学・外国語学部	2022年 3月8日	約38分	兵庫県
	6		JM_10	男性	4年	D大学・工学部			大阪府
インドネシア語	7	JM⑥	JM_11	男性	3年	A大学・外国語学部	2022年 3月11日	約44分	愛知県
	8		JM_12	男性	4年	D大学・工学部			愛知県
	1	IF③	IF_5	女性	2年	E大学・教育学	2021年 8月31日	約44分	東ジャワ州マラン市
	2		IF_6	女性	2年	F大学・国際関係			東ジャワ州マラン市
	3	IF④	IF_7	女性	2年	G大学・インドネシア文学	2021年 9月3日	約50分	ジャカルタ首都特別州
	4		IF_8	女性	4年	H大学・ジャワ文学			ジョグジャカルタ特別州
	5	IF⑤	IF_9	女性	3年	H大学・ジャワ文学	2021年 9月3日	約80分	東ジャワ州ジョンバン県
	6		IF_10	女性	3年	I大学・土木工学			東ジャワ州クディリ市
	7	IM③	IM_5	男性	2年	H大学・ジャワ文学	2022年 1月20日	約38分	ジャカルタ首都特別州
	8		IM_6	男性	2年	G大学・歴史学			ジョグジャカルタ特別州
	9	IM④	IM_7	男性	4年	H大学・図書館学	2022年 1月31日	約52分	ジョグジャカルタ特別州
	10		IM_8	男性	4年	G大学・ジャワ文学			東ジャワ州マラン市

3.2 分析方法

分析方法としては以下のような手順をとる。

- ① 収集したそれぞれの会話を文字化し、分析データとした。文字化に用いた記号は、『社会言語科学』第10巻第2号特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」（2008）から抜粋され、筒井（2012）に掲載されているものを参考にした。次に一覧を示す。

表2 文字化に用いた記号

[	複数の参加者の発する音声を重ねて始めている時点は、角括弧（〔 〕）によって示される。
[]	重ねの終わりが示されることもある。
=	2つの発話が途切れなく密着していることは、等号（=）で示される。
()	聞き取り不可能な箇所は、()で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
()	0.2秒以下の短い間合いは、()内にピリオドを打った記号、つまり()という記号によって示される。
言葉：:	直前の音が延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
言-	言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される。
言(h)	呼吸音の記号は、笑いを表すのに用いられる。とくに笑いながら発話が産出されるとき、そのことは、呼吸を伴う音のあとに(h) またはhを挟むことで示される。
., ?	語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオド(.)で示される。また、音が少し下がって弾みが付いていることはカンマ(,)で示される。そして、語尾の音が上がっていることは疑問符(?)で示される。
(())	発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。

② 話題項目

本稿では、三牧(2013:171)の23の話題選択スキーマを参考にして、18の話題項目を設定し、3.1の表1で示した会話参加者が会話を開始してから5分以内の間にいった話題項目を分類した。その結果を表3で示している。

表3 会話を開始してから5分以内に提供された話題項目

話題項目	インドネシア語話者					日本語母語話者				
	IF③	IF④	IF⑤	IM③	IM④	JM⑥	JM⑦	JF④	JF⑤	JF⑥
大学	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
学年	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
学部・学科	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎(△)	◎	◎
名前	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
出身		○(△)	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎(△)	○
授業	○			○	◎				◎	
他者			○		○	○			◎	
居住地		○	◎	○		○	○			
海外経験						◎	○		○	
就活								◎		◎
年齢			◎						◎	
大学生活	○	◎								
部活・サークル	◎									○

インターン シップ			○							○
会 話 参 加 関 連									◎	
休学									○	
天気					○					
旅行								○		

◎は情報が相互に交換されていることを示す

○は情報が一方のみから提供されていることを示す

△は会話を開始してから5分～15分の間に提供されている情報だということを示す

表3で示されているように、両言語の会話で最も提供されている話題項目は「大学」「学部・学科」「学年」及び「名前」である。本稿では、これら4つの話題項目を「基本情報」とし、これらを初対面会話で行われる自己開示における「自己紹介部分」の範囲として扱い、本研究の分析対象とする。分析では、自己紹介のやりとりを見る上で、最も多く提供された基本情報である「大学」「学部・学科」「学年」及び「名前」が発話されてから話題が移行するまで、導入の形式、いつ提示するのか、そしてその後の受け手側の反応を検討しながら、どのように開示されるかを分類し、その表出の傾向を見る。自己紹介部分のやりとりをめぐるインドネシア語話者と日本語母語話者の言語行動の共通点と相違点を考察し、各言語に特徴的に見られた現象を抽出・記述する。

4. 分析結果

4節では、表3において最も多く提供された「基本情報」について、自己紹介部における自己紹介の開始及び自己紹介の展開という2つの観点からデータを分析、考察する。

4.1. 自己紹介の開始部

ここでは、自己紹介が開始される際の発話と名前が名乗られる際の発話の2つに着目して、考察していく。

4.1.1. 自己紹介の開始部

インドネシア語話者と日本語母語話者の自己紹介は、両言語において「こんにちは」「はじめまして」「halo」「salam kenal（よろしくお願いします）」など出会いの場面では一般的と考えられる定型的な挨拶で始まる。ただし、インドネシア語話者と日本語母語話者の参加者では、挨拶を交わした後の、自分の名前・学年・専攻などの基本情報の開示方法が異なっていた。

ここでは、挨拶を交わしてから、どのように基本情報を展開するのか分析する。まず、日本語の事例を見てみる。

事例(1) 日本語男性ペア JM⑥

1	JM_12	お願いします。
2	JM_11	はい、お願いします。
3	JM_11	[まじか]。
4	JM_12	[()]
5	JM_11	え：と、いいんかな、もう。
6	JM_11	[こんにちは]。
7	JM_12	[もうやっちゃいます?]
8	JM_11	はい。
9	JM_11	え：と、そうか。
10	JM_11	なんか、特にテーマとかはない感じなんですね (h)
11	JM_12	そうですねホンマ何でも OK って感じですね、多分。
12	JM_11	[え、これ]
13	JM_12	[とりあえず] 自己紹介行きます?]
14	JM_11	あ、そう、そうですね
15	JM_11	そうですねそうね
16	JM_11	え：と、え：と、じゃあ、え：とじゃ：僕から行こうかな、じゃ：。
17	JM_12	はい。
18	JM_11	え：と、どこ、どこまで話せばいいんだろ。
19	JM_11	え：と、じゃあ出身、大学かな今の大学かな。
20	JM_11	え：と、D大学、あれ?D大学生か?
21	JM_12	いや、僕あのAさん(筆者の名前)とA大です (h)。
22	JM_11	あ、全然
23	JM_12	あ、そうなんだ

上記の日本語の会話事例(1)では、JM_12は1行目で、「お願いします」と日本語の定型的な挨拶で会話を始め、次の2行目で相手のJM_11は「はい、お願いします」と回答している。しかし、その後すぐに自己紹介を開始するのではなく、JM_11は5行目で「え：と、いいんかな、もう。」と会話を開始しても良いかどうかを確認する発話をした上で、6行目で「こんにちは」という挨拶をして、改めて会話を開始しようとしている。一方、JM_12はそれと同時に7行目で「もうやっちゃいます?」と会話を開始することの確認を求めている。JM_11が8行目で「はい」と同意を表したことで、やっと会話を開始することのお互いの同意が取れているが、JM_11は「なんか、特にテーマとかはない感じなんですね (h)」と、会話の内容に関する確認要求をした。相手のJM_12は11行目で「そうですねホンマ何でも OK って感じですね、多分。」と確認し、13行目で「とりあえず自己紹介行きます?」と話題を提案した。それを受けたJM_11は同意を示し、16行目で「え：と、え：と、じゃあ、え：とじゃ：」と言い淀んで「僕から行こうかな、じゃ：」と発話し、自分から自己紹介を開始しようとしている。JM_12はそれをすぐに受け入れている。Shigemitsu (2009) によれば、「スロー・イニシエーター・マーカー」と言われている「えーと」「あの」「じゃー」のような間投詞は、参加者が発話者として会話を開始できるかどうかを確認する場所になる。JM_11はこれらの間投詞を用いて、自分が自己開示を開始して良さそうかを確認していたと考えられる。このように、JM_11とJM_12の日本語母語話者の間では、最初の挨拶の後、話題内容についての確認が行われ、誰が先に自己紹介を開始するのかを決定するための交渉が行われていた。

日本語の事例 (1) における自己紹介は、挨拶を交わした後もすぐに基本情報を提供せず、どちらが先に自己紹介を始めるのかをあらかじめ交渉していた。今回の日本語母語話者のデータでは、5 つのうち 2 つの事例で、誰から自己紹介を始めるかについて交渉していた事例が見られた。これに対して、インドネシア語の事例を見てみよう。

事例 (2) インドネシア語女性ペア IF③

1	IF_6	Hai	ヤッホ:.
2	IF_5	Halo (h)	こんにちは (h) .
3	IF_6	Halo? Halo, namakamu siapa?	こんにちは? こんにちはあなたの名前は誰ですか?
4	IF_6	Boleh kenalan gak?	知り合いになってくれない?
5	IF_5	Boleh.	いいよ.
6	IF_5	Aku IF_5((nama panggilan)), namaaku IF_5((nama lengkap)).	私は IF_5((ニックネーム)) 私の名前は IF_5((フルネーム)).
7	IF_5	Biasa dipanggil IF_5((nama panggilan)).	普通は IF_5((ニックネーム)) と呼ばれている.
8	IF_5	Aku saat ini kuliah di Univ.E.	私は今 E 大学に行っています.
9	IF_5	Kalokamu?	あなたは?
10	IF_6	A: aku IF_6((nama lengkap)).	あ: 私は IF_6((フルネーム)).
11	IF_6	Biasanya itu, banyak ini, panggilannya.	普段はたくさん呼び名ある.
12	IF_6	Adakadang itu NN((nama panggilan 1)), ND((nama panggilan 2)), kadang juga Donat.	たまに NN(ニックネーム 1), ND(ニックネーム 2) たまにドーナツってことも.
13	IF_6	Yang jadi pertanyaan itu mesti kenapa kok dipanggil Donat.	疑問に思ったのはなんでドーナツと呼ばれているか.
14	IF_6	Karena kan dulu, dulu itu, e, pas SMA sukanya itu kalo jajan, (h) .	だってさ昔、昔にちょうど高校の時によく買い食いをして.
15	IF_6	Selalu beli, pagi-pagi itu donat karena takut keabisan soalnya enak.	いつも買ってた朝早くからドーナツを美味しいから売り切れるのがいいや.

(授業に関する話題を展開する)

事例 (2) では、挨拶を交わしてから、IF_6 は 3 行目で「あなたの名前は誰ですか?」と IF_5 の名前を尋ねた後、4 行目で「知り合いになってくれない?」というインドネシア語における定型的な自己紹介の挨拶を発話して、関係の構築を呼びかけた。IF_5 は 6 行目で、「私は IF_5((ニックネーム))」とニックネームを提示したが、発話途中で発話を修正し、「私の名前は IF_5((フルネーム))」と自分のフルネームを提示し直してから、7 行目で「普通は IF_5((ニックネーム)) と呼ばれている」と自分の呼び名を自ら提供して、名前に関する質問に対して回答している。それに続いて「大学名」を提供してから、IF_5 が 9 行目で「あなたは?」と IF_6 に質問したことで、開示者と聞き手が入れ替わっている。IF_6 は、10 行目で「ああ、私は IF_6((フルネーム))」と自分の名前を提供し、その後、11 行目から 15 行目まで呼び名について情報を提供した。11 行目-12 行目では、「普段は、たくさん、呼び名ある。たまに NN((ニックネーム 1)), ND((ニックネーム 2)), たまにドーナツってことも」と述べ、IF_6 の呼び名はただ一つだけではなく、NN((ニックネーム 1)), ND((ニックネーム 2)), ドーナツといういくつかの呼び名があることを開示した。また、13 行目から 15 行目で「ドーナツ」という呼び名に関するエピソードを開示した。

事例 (2) は、挨拶を交わしてから、相手の「名前」を直接的に質問して、自己紹介を始める事例である。日本語の事例 (1) と異なり、このインドネシア語話者の事例では、挨拶を交わしてから、誰から会話を開始するかの確認を行っていない。インドネシア語話者による 5 つの会話データでは、いずれの場合でも、挨拶が交わされた後、会話参加者の一方が、すぐに自己紹介を開始していた。

以上の事例から、挨拶が交わされてから、どのように自己紹介が開始されるかを観察した。

4.1.2. 名前の名乗り方

基本的に自己紹介を開始する際に、自分の名前を開示するか相手の名前を聞くことは一般的であるが、今回の日本語とインドネシア語のデータから、自己紹介の開始において名乗る際の相違点が観察された。まず、日本語の事例を見てみる。

事例(3) 日本語女性ペア JF⑥

1	JF_12	はい, お願いします.
2	JF_12	ということでね, え:, うちを志望した理由をね
3	JF_12	じゃあお願いします.っていうのは=
4	JF_11	うん
5	JF_12	=うそなんですけど (h) .
6	JF_12	えと: A大学ですか?
7	JF_11	あ, そうです.
8	JF_12	あ: インドネシア語とか?
9	JF_11	えと, 日本語専攻の中で=
10	JF_12	あ
11	JF_11	=インドネシア語を勉強して.
12	JF_12	あるんですね
13	JF_11	そうなんです.
14	JF_11	なんか, () じゃないけど.
15	JF_11	A大のシステムがよくわかってなくて.
16	JF_11	なんか日本語専攻っていう()ちょっと不思議な専攻があって.
17	JF_12	<いや>うちにもあるの.
18	JF_12	C大:
19	JF_11	で, その中で.
20	JF_12	あの: C大, C大.
21	JF_11	あ: そうなんですか.
22	JF_12	でインドネシア語やっとなって日本語科もあるんですけど, 日本語科でインドネシア語をやってる人はなかなか見ないの.
23	JF_11	なんか, 日本語科の中に()なんか, もう1個 ()
24	JF_12	あ: : あるあるね

上記の日本語の事例では、1行目で JF_12 は「はい, お願いします」と発話し、そのまま続けて2行目で「ということでねえ:, うちを志望した理由をね」と述べ、オンラインの採用面接試験における面接官のような発話をしているが、すぐに、3行目と5行目で、「っていうのは」、「うそなんですけど (h) .」と発話し、それが冗談であることを示している。会話参加者はお互いの情報を持たずに会話しており、JF_12 は冗談に続けて6行目で「えと: A大学ですか?」と、直接 JF_11 に「大学名」の確認要求をした。2人の会話が始まる前に筆者が筆者の所属大学を事前に会話参加者に紹介したため、JF_12 はこの発話で筆者と会話の相手の JF_11 とのつながりを見出そうとしたと考えられる。JF_11 は7行目で「あ, そうです」と限られた反応で応答した。JF_12 は次に8行目で「あ: インドネシア語とか?」と質問し、さらに「学部・専攻」に関する情報を要求した。その後 JF_11 は9行目と11行目で「えと, 日本語専攻の中で, インドネシア語を勉強して。」と自分の学部・専攻に関して開示した。ここでは、「学部・専攻」の話題はすぐに終了せず、JF_11 はA大学の学部・専攻のシステムについて、14行目から16行目で詳しく説明している。そして17行目で話し手となった JF_12 は18行目で自ら「大学名」を開示し、自分が所属する大学における同様のシステムについて、22行目から23行目で説明を行なった。

このデータでは、24 行目まで、会話参加者は互いに自分の名前を開示せず、また相手の名前も聞けなかった。日本語の事例では、会話参加者がビデオ通話の画面上に自分と相手の名前が表示されているために、自己紹介するときに名前を開示しない会話が5つの会話のうち、3つの会話で見られた。一方、名前を名乗る事例は、次の事例 (4) のようなやりとりである。

事例 (4) 日本語女性ペア JF④

1	JF_7	初めまして.
2	JF_8	初めまして.
3	JF_7	よろしく (h) お願いします.
4	JF_8	お願いします.
5	JF_8	JF_8(フルネーム)です.
6	JF_7	JF_7(フルネーム)と申します.
7	JF_8	え：と、これ：はどんな話でもいいんですか (h) .
8	JF_7	おそらく、ちょっと、私も、あの (h) , わかってない (h) ところが()あって.

上記の事例 (4) では、1 行目から 4 行目までで、定型的な挨拶を交わした後、会話参加者は自分の名前を開示した。その後、7 行で JF_8 はどのような話題で話せばいいかの確認を行っている。名前を紹介する時に、日本語母語話者は口頭の場合でも、名字を含めた、フルネームを開示していた。日本語では、出会ってすぐに相手を下の名前で呼んだり、自らを下の名前で名のつたりする習慣がないためかもしれない。

上記の日本語事例を見ると、日本語母語話者は名前を開示する際に、事例 (4) の 5 行目と 6 行目のように短く簡潔に発話している。一般的に日本語母語話者は下の名前で呼ばずに、名字で呼ぶという習慣があり、このデータのように、名前を開示する際にターンを短く終わらせている。

次にインドネシア語の名前の名乗り方について、事例 (5) で、挨拶した後には名前を開示している部分を見てみたい。

事例 (5) インドネシア語女性ペア IF④

1	IF_7	Haloo.	こんにちは
2	IF_8	udah?	もう?
3	IF_7	Halo, haloo. (h)	こんにちは、こんにちは (h) .
4	IF_7	IF_8((nama lengkap))di-dipanggilnya siapa ini?	IF_8(フルネーム) な-なんて呼ばれていますか?
5	IF_8	umm, panggilnya F((nama panggilan)) ajadzh.	うん：F(ニックネーム)と呼んで.
6	IF_8	Tapi kalau F((nama panggilan)) susah, panggil CC((nama panggilan)) aja.	F(ニックネーム)が難しいなら、CC(ニックネーム)で.
7	IF_8	CC((nama panggilan)) kayanya [lebih] gampang.	CC(ニックネーム) [の方] がもっと呼びやすい.
8	IF_7	[CC((nama panggilan))]	[CC(ニックネーム)]
9	IF_7	Oke CC((nama panggilan)) ajadzhya.	はい、じゃ、CC(ニックネーム)でね.
10	IF_7	Biar agak akrab (h)	ちょっと親しい感じになるように (h) .
11	IF_8	Iya.	はい.
12	IF_7	CC((nama panggilan)).	CC(ニックネーム).
13	IF_8	Siap.	了解.
14	IF_8	Kalau kalau IF_7((nama lengkap)) sendiri ini aku harus memanggilnya gimana nih?	IF_7(フルネーム)さんは、私は何と呼べばいい?
15	IF_7	Panggil IF_7((nama panggilan)) aja.	IF_7(ニックネーム)で呼んで.
16	IF_8	Oke IF_7((nama panggilan)).	はい、IF_7(ニックネーム).
17	IF_8	Hai salam kenal, IF_7((nama panggilan)).	こんにちは、よろしくね、IF_7(ニックネーム).
18	IF_7	Iya salam kenal.	はい、よろしくね

上記の事例 (5) では、1 行目-3 行目で挨拶が交わされた後、IF_7 は 4 行目でビデオ通話の画面に名前が表示されているのにも関わらず、IF_8 の名前を発話してから呼び名を尋ねた。IF_8 は 5 行目で

「うん：F((ニックネーム))と呼んで。」と呼んで欲しい呼び名を提示した。一般的に多くのインドネシア人の名前では、姓と名は区別されていない。民族によって「姓」を持っている人もいるが、「姓」の概念は日本とは少し異なる。インドネシア人の中では、実際の名前の一部が取り出された呼び名や実際の名前とは直接関係がない呼び名が頻繁に用いられる。初対面でも親しい関係でも、お互いを短い呼び名で呼ぶことは当たり前のことである。基本的に、インドネシア語話者間のコミュニケーションにおいて呼び名、特に本名に近いニックネームは、友人間の親しみを表す一種の表現であり、2人以上の人々が互いに親しいことを示すものだと考えられる。この事例では、これは恐らく「F」という呼び名が、IF_8と親しい友人との会話で用いられており、IF_7とも親しくなろうとしてそのように発話したと考えられる。しかし、その後6行目と7行目では「F((ニックネーム))が難しいなら、CC((ニックネーム))で、CC((ニックネーム))がもっと呼びやすい」と修正し、初めて会う人に対して、いつもの「F」ではなく、もっと簡単な呼び方のCC((ニックネーム))と呼ぶことを勧めた。その後質問したIF_7は9行目で「はい、じゃ、CC((ニックネーム))だね」とIF_8の呼び名を「CC((ニックネーム))」と受け取り、続けて10行目で「ちょっと親しい感じになるように(h)」と発話し、呼び名で呼ぶことによってIF_8との距離感を縮めたい気持ちを示した。その後、IF_8はIF_7と同じく、画面に表示されているIF_7の名前を発話してから、呼び名を尋ねた。IF_7は15行目で、自分の呼び名を開示した。

自己紹介における名前の開示を見ると、多くのインドネシア語話者は、名字を持たない人が多いため、一般的には自分のニックネームや呼び名を開示したり、相手に質問したりすることで、どう呼べばいいかわかるようにする。そのため、名前を開示する際に数回のターンを必要としている。また、Masfufah (2019)によれば、インドネシアの文化では、相手の名前を呼びかけることは、相手に対して相手との会話を開始する機能を持ち、名前を呼びかけることは重要な社会的意味を持っている。インドネシア語の事例では、自分の名前を開示することと相手の名前を尋ねることは自己紹介では必要であり、相手との距離感を縮める機能を持っていると考えられる。

これに対して、今回の日本語母語話者のデータでは、5つの会話データのうち3つのデータではすでに相手の名前がビデオ通話の画面に表示されているため、お互いの名前が相手に口頭で開示されなかった。他の2つの会話データでは名前を開示しているが、インドネシア語話者の事例よりも名前の開示にかかるターンが短かった。これは、日本語母語話者にとっては、初対面の相手に対して自分の名前に関する情報を必要以上に開示する必要がないためだと考えられる。

以上の日本語の事例及びインドネシア語の事例では、挨拶を交わしてからの名前に関する開示について考察した。

4.2 自己紹介の展開

上記の会話事例では、挨拶を交わした後、インドネシア語話者はまず基本情報である「名前」を開示するのに対して、日本語母語話者は「学部・専攻」を会話の比較的早い段階で開示する事例が観察された。ここでは、「名前」以外の基本情報をどのように開示するのかを観察し、自己紹介の展開を考察する。まず、日本語の事例を見てみたい。

事例 (6) 日本語女性ペア JF⑤

- 12 JF_9 びっくり。
 13 JF_9 え：会話え、おいくつですか。
 14 JF_10 にじゅうにです。
 15 JF_9 はにじゅうに。
 16 JF_9 私は：にじゅういっさいです。
 17 JF_10 え、なんか：、次、4回生に上がる()ぐらいってことですか。
 18 JF_9 うん：次四年生。
 19 JF_10 あ：。
 20 JF_9 え、今四年生ですか？
 21 JF_9 今、4年なんですけど、一回、えと：夏学期から休学して、今1年間休学してる最中で。
 22 JF_10 え
 23 JF_10 一回、えと：夏学期から休学して、今1年間休学してる最中で、オンラインで、あの留学してます。
 24 JF_9 あ：へ：すごい。
 25 JF_9 え：ってことは、え、四年。
 26 JF_10 春からきゅ：がく、ん
 27 JF_10 なので、いや、えと秋学期から復学して、あと、半期だけ学校通ったら、
 28 JF_10 卒業なので、にじゅさん年卒業です。
 29 JF_9 あ、そうなんですな
 30 JF_9 へ：。
 31 JF_9 すごい：え、それは、どの、ど：いう留学なんですか。
 32 JF_9 どういう、ってか、どこの国？
 33 JF_10 あ、インドネシアです。
 34 JF_9 あ、インドネシアですかいへ：
 35 JF_10 はい。
 36 JF_9 は、そうなんですな
 37 JF_9 へ：：。
 38 JF_10 <だから>私今日、そのインドネシアの
 39 JF_9 はい。
 40 JF_10 私インドネシア語専攻なんですけど、
 41 JF_9 はい。
 42 JF_10 そこにいい、なんですか、院生のインドネシア人の方が、なんか今回こういうのはあるから、ちょっと参加してみてよ。
 (中略：会話に参加したきっかけの話題に展開する)
 46 JF_9 え、私：も、えインドネシア語専攻で。
 47 JF_9 で、このあの、Aさん、がその：同じ大学の院生で、なんか、私が大学一年生の時にTAさんで、なんか、授業行ってくださったりして。
 48 JF_9 ま、()があつて、で、なんか誘ってくだ誘うっていうか。
 49 JF_10 あ：。
 50 JF_9 そう、って感じです。

上記の日本語の事例 (6) の直前の1行目から11行目では、JF_9が当初マイクをミュートに設定したまま会話しようとしていたために、JF_10がJF_9に確認の作業を行っていた。この会話事例では会話参加者は自分の名前を開示せずに、13行目から、JF_9が「えー会話え、おいくつですか」と発話し、相手のJF_10に「年齢」に関して質問し、自己紹介のやりとりを始めている。13行目から16行目まで「年齢」に関する情報を交換した後、JF_9はJF_10の年齢の情報に基づいて17行目で「次、4回生に上がる、ぐらいつてことですか」と発話し、「学年」に関して質問した。JF_10は21行目で

「今、4年なんですけど、一回、えと：夏学期から休学して、今1年間休学してる最中で。」と説明し、「学年」に関する質問に対しての回答を提供した直後に、21行目から39行目まで「留学」に関する話題を展開した。ここでは、「学年」の情報は単なる情報ではなく、そこで別の話題、「留学」に展開するきっかけになったと考えられる。その後、留学先の関連で、JF_10は40行目で「私インドネシア語専攻なんですけど、」と発話し、自分の「専攻」を開示した。「専攻」の話題を開示した後に、JF_10は本調査への参加のきっかけを語り始めた。JF_9も46行目で同様に自分の「専攻」を開示してから、会話調査への参加のきっかけを語っている。

このような、「学年」や「専攻」の話題は自己紹介部において、単に開示することで終わるのではなく、それについて会話を深める事例が観察された。それに対して、インドネシア語の事例を見てみたい。

事例(7) インドネシア語男性ペア IM④

1	IM_8	Halo.	こんにちは
2	IM_7	Halomas.	兄さんこんにちは
3	IM_8	E.pkenalkan dulu deh nama gua IM_8(((nama panggilan))).	え：とりあえず、初めまして僕の名前はIM_8((ニックネーム)).
4	IM_8	Dari nama panjangnya IM_8(((nama lengkap))).	から-フルネームはIM_8(フルネーム).
5	IM_8	Dari Univ. Hangkat 2018.	2018年度入学でH大学からきました.
6	IM_8	Ilmu Perpustakaan.	図書館学です.
7	IM_7	Wow, aku IM_7(((nama lengkap))). Mas, bisadipanggil IM_7(((nama panggilan))).	おお、僕はIM_7(フルネーム)、IM_7((ニックネーム))と呼んでくださいね.
8	IM_7	E: dari Sastra Jawa Univ. G 2018 juga.	え：、G大学のジャワ文学から、同じく2018年度です
9	IM_7	Kita seangkatan (h).	僕らは同級生だね (h)
10	IM_8	O: : , Mantap (h)	お：： すごい.
11	IM_7	Masya allah mana?	兄さんは出身は?
12	IM_8	E: , Saya asli : : , Ja-jawa sih.	ええ、僕は出身は：：ジャ-ジャワだけど.
13	IM_8	Ada keturunan Jawa.	ジャワ人の血統がある.
14	IM_8	Cumanya : tinggal dan dibesarkan di Jakarta.	ただ、ま：、育ったのはジャカルタ (地名) .
15	IM_7	Ooh, oke.	おお、はい.
16	IM_8	Di Univ. G, IM_7 sendiri gimana?	G大学で、IM_7はどう?
17	IM_8	Sekarang kan lagi : harusnya udah ngurus ngurus skripsi kan ya?	今はやってる：、卒論をやってるはずだよ?
18	IM_7	Iya Mas, kebetulan di jurusan saya juga baru Februari besok ini ngambil mata kuliah skripsi.	はい、実際のところ、僕の専攻では次の2月に卒論の授業を取る.
	IM_7	Jadi kita tunggu jurusan kita dekat satu semester gitu.	つまり、こちらは一学期遅れている。(卒論の授業のこと)

上記の事例(7)では、挨拶を交わしてから、IM_8は3行目で「ええ、とりあえず、初めまして」と発話し、ターンをとった。続いて「名前」、「大学名」、「入学年」と「専攻」について自発的に開示した。最初に聞き手となったIM_7は「おお」と評価して、すぐに7行目から9行目まで、「名前」、「専攻」、「大学名」と「入学年」に関する基本情報を開示した。この事例で、IM_7は自ら「名前」、「呼び名」、「大学名」、「学年」を開示したが、その一連の開示の発話が行われる間には、基本情報の話題項目は他の話題に展開することはなかった。ここでは、提供の形として会話参加者両方は「質問応答」のやりとりではなく、一気に基本情報を開示している。ただし、その後、IM_7はIM_8に「出身地」について尋ねたが、IM_8は回答した後、IM_7には同じ質問をせず、一方的に卒論に関する話題を出して、17行目で「今はやってる、卒論をやってるはずだよ?」とIM_7に尋ねている。この話題はお互いに同じ時期に大学に入学したため、「学年」の話題から「卒業」についての話題に展開したのだと思われる。

この事例のように、今回のインドネシア語の会話では、「学部・学科・専攻」の話題は、自己紹介の際に伝えるべき情報としてのみ出てきており、それらは簡潔に開示されていた。したがって、これらの話題は、一つの発話の中に連続して現れるか、あるいは「質問-回答」の形でやりとりの中の短いターンで出現した。それに対して、日本語では、これらの話題は、「これから語ること」に対する導入として開示されるように見うけられた。

5. まとめと今後の課題

今回の研究では、日本語母語話者とインドネシア語話者の大学生のオンライン会話における自己紹介部分を考察した。本研究で扱った初対面の会話の自己紹介では、相手にどのように自己開示するのかについてインドネシア語話者と日本語母語話者の間に共通点と相違点があることがわかった。

共通点として日本語母語話者もインドネシア語話者も初対面会話を開始する際に、「こんにちは」「はじめまして」「halo」「salam kenal (よろしくお願いします)」など、出会いの場面で一般的と考えられる定型的な挨拶を用いていた点が挙げられる。また、相違点としては、以下の3点が挙げられる。

1. インドネシア語のデータにおいて、インドネシア語話者は、直接自分から自己紹介を開始するか、相手の名前に関する質問に答えてから、自己紹介を始めていた。一方、日本語の会話では、参加者は挨拶の後すぐに自己紹介を始めるのではなく、どちらから自己紹介を始めるのかを交渉するために交渉した後、自己紹介が開始される事例が見られた。
2. インドネシア語では、挨拶をかわした後、すぐにターンをとって、自ら自己紹介するか相手の情報を尋ねていた。今回のデータでは、相手との距離を縮めるために名前を長いターンで開示していた。今回のインドネシア語の事例では、自分の名前を開示することと相手の名前を尋ねることは自己紹介では必要だとされていることが明らかになった。これに対して日本語の事例では、名乗る際のターンがインドネシア語の場合よりも短かった。
3. 自己紹介する際に、インドネシア語の会話では、「学科・専攻・学部」の話題は、自己紹介の際に伝えるべき情報としてのみ出てきていた。したがって、これらの話題は、一つの発話の中に連続して現れるか、あるいは「質問-応答」の形でやりとりを行い、短いターンで出現する事例が見られた。一方日本語では、これらの話題は、「これから語る事柄」に対する導入として開示されているように思われた。樋口(1996)では、日本語母語話者同士の会話でははっきりした自己紹介の固まりを観察することができると述べられていたが、今回の日本語母語話者同士の事例では自己紹介部は自己紹介部とその他の部分の区別が観察されない事例があった。それに対して、インドネシア語話者同士の会話事例では、自己紹介部において、はっきり区別が見られた。この結果は、日本語の事例では専攻や学年などに関する話題は、次の話題に入るきっかけとなっていた事例が多く、専攻や学年の話題

の開示は長くは継続されなかったためである。今回の研究では、日本語母語話者が相手と似たような専攻に所属していたため、専攻の話題が開示された際に、すぐに関連する話題に広げていったと考えられる。また、樋口（1996）は25年以上前の研究データであり、日本語母語話者同士の初対面会話において、コミュニケーションのスタイルが変化している可能性もあると考えられる。

ただし、本稿で扱った事例の数には限りがあったため、これらを一般化するのは難しい。また、オンライン会話だけではなく、対面の会話も分析する必要がある。

今後はインドネシア語話者日本語学習者が日本語母語話者やインドネシア語話者との異文化コミュニケーションにおける問題を回避するためには何が必要かを明らかにするために、初対面会話での自己開示の内容を明らかにし、両言語における自己開示の内容によってどのようにやりとりが行われるかを会話分析で検討する必要がある。

【参考文献】

- 今田恵美（2015）『対人関係構築プロセスの会話分析』大阪大学出版会
- 岡本佐智子（2006）「日本人の自己紹介における自己呈示」『北海道文教大学論集7』 pp.51-63.
- 橘広司（2012）「日本人における「苗字の重視」と英語教科書に見る呼称の問題―「初対面」の場を中心に―」『言語教育研究』創刊号桜美林大学大学院言語教育研究科 pp.67-78
- 筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版
- 樋口斉子（1996）「初対面会話での話題の展開1「日本人の談話行動のスクリプトストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作」」『研究成果報告書』 pp.75-110
- 三牧陽子（2013）『ボライトネスの談話分析―初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
- Jourard, Sidney（1971）*The Transparent Self*. New York: Litton Educational Publishing, Inc.
- Masfufah, Nurul（2019）“Nicknames Based on Family Members Who Died In The Language Of Kenyah Lepoq Jalan In Lung Anai Village” in *LOA Jurnal Ketatabahasaan dan Kesusastraan* 14(2) pp.105-116
- Shigemitsu, Yuka（2009）“Conversational styles of Japanese: when participants get their speakership”. In *Academic Reports Fac. Eng. Tokyo Polytech. Univ.* Vol. 32 No. 2 pp.1-8